家族と住まいの生態学的研究
—三世代同居における家族メンバーとのパーソナル・スペースと親密性について—

今 川 峰 子・譲 西 賢・齋 藤 善 弘

An Ecological Study on Family and Home
—Personal Space and Intimacy of the Student, the Middle-aged and the Elderly toward Their Family Members—

Mineko Imagawa, Saiken Yuzuri, Yoshihiro Saitou

Abstract

The aim of this study was to compare the personal space and intimacy of the student, middle-aged and the elderly toward their family members. We also examined gender's and generation's differences, and compared to the two cases of the family who lived with son's family or daughter's one. Subjects from 56 families were 81 elderly persons (mean age 73.6), 110 middle aged (mean age 47.8) and 56 students (mean age 19.0). Interpersonal distances of elderly women toward to husband were far than elderly men toward to wives. Mothers in middle-age group and the elderly group were closer to daughter than son. Fathers in both groups were far from daughter and son. The elderly had greater feelings of warmth among family members, but they were distant from children-in-law. The degree of intimacy of the students who lived with mother's parent were greater to grandmother than the student living with father's parent.

Key words

personal space, projective method, intimacy, middle-aged, the elderly

【問題の所在】

1．三世代同居家族の減少の背景

1982年以降，５年間隔に実施されてきた高齢者の国際比較調査（総務庁長官官房老人対策室，1982，1987，1992，1997）によると，高齢者にとって最も大切なものを，「家族・子ども」と答えた割合は80％以上にのぼる。そして，理想の家族とは，親・子・孫等が同居する大家族と答える割合は高齢者ほど高くなっている。60歳以上の年齢では，理想の家族を親・

子・孫等が同居する大家族と回答した割合は48.6%，夫婦と子どものみで住むが親の近くに住むとの回答は31.7%であった(経済企画庁，1994)。年齢が高いほど，息子家族との同居を希望する割合は高くなっている。80歳以上では51.1%，60歳～64歳では33.0%，45歳～49歳では20.9%であり，世代が若くなるほど，大家族で住むよりも，別居することを望む割合が高くなっている(総務庁長官官房老人対策室，1997)。一般に，男性よりも女性の方が別居を望む結果となっている。しかも，子世代との同居には地域差がみられ，都市部と郡部を比較すると，郡部の農村地帯の方が，都市部よりも同居を望む率が高い。

なぜ高齢者世代より若者世代が，男性より女性が，郡部よりも都市部の方が，同居希望が低いのであろうか。日本の同居率は減少してきてはいるが，先進工業国の中では高い。欧米では同居率が極めて低く，日本の事情とは異なる。この違いの背景として，戦前まで続いた「家」制度が，日本人の家族観・人生観に反映してきたことを挙げることができよう。戸主権・男系長子相続を規定する「家」制度は明治・大正・昭和の家族関係に大きな影響力を持ってきた。特にこの制度によって，女性は婚姻決定権・財産相続権・居住決定権を持てない不利な状態に置かれていた。「女は三界に家無し」との諺があるように，結婚するまでは親に扶養され，結婚後は夫に，そして夫の死後は息子に扶養される立場に立たされていた。女子の教育は良妻賢母を理想とし，女性は従順でやさしい家庭人になることが求められた。このように「家」制度の存続を支えたのは，一つは民法による規定であり，もう一方ではしつけを通して獲得される伝統的な性役割意識である。「家」制度は1946年に廃止されたが，その後10年を経過して実施された世論調査でも，先祖からうけついだ「家」というものは大事に守って子孫に伝えなくてはならないと回答するものの割合が72%と，依然高い水準にあった。民法改正当時，改正に賛同したのは，若い結婚前の女性や都市部に勤める賃金労働者であり，逆に「家」制度に執着した層は郡部の既婚男性，農林漁業従事者，低学歴層であったといわれる(金子，1992)。「家」意識は今日では薄れているが，農村部では相続や先祖供養と老親の介護を長男が引きうける例は依然として多い。このため，都市部よりも郡部が，女性よりも男性が，若い世代よりも高齢者世代が，「家」を意識し，息子家族との同居を望む率も高くなっている。

2．発達過程と「家」意識・伝統的な性役割意識

民法が改正されても，すぐに「家」意識や伝統的な性役割意識が変化するものではない。その理由は，人の価値観や人生観は，家庭教育や学校教育などを通して徐々に形成され，一旦獲得されるとそれほど変化しないためである。要するに，発達的には，児童期後期から青年期にかけて，アイデンティティが徐々に確立されてくる。この時期を通して獲得された価値観や人生観は，その後の人生において，その人の態度や行動を規定し，環境の変化に応じて修正されるが，それほど大きく変わることはない。65歳以上の高齢者世代は「家」制度の下で児童期・青年期の教育を受けて育った世代である。戦後生まれの団塊の世代といわれる

中年世代では，戦後の民主主義教育を受け，家庭教育でも「家」を意識することが少なくなりはじめた世代である。そして現在の若者世代は，団塊の世代を親として生まれた世代であり，「家」意識が薄れた親に育てられた世代である。このため「家」への固執はほとんどなくなってきている。このように，日本人は敗戦によって，「家」制度の廃止という大きな社会変動を経験し，そのことが世代による人生観・価値観の違いを生み出している。

世界恐慌を幼少期で体験した世代と，青年期で体験した世代の違いと，バークリーで育ったのか，マンチェスターで育ったのかによる場所の違いによって，その人のライフコースが異なることを紹介したアメリカの Elder（1993／1997）の功績は，今日では高く評価されている。残念なことに，アメリカ以上の社会変動を経験している日本では，アメリカで実施されたような長期の縦断研究のデータが得られていない。

3．三つの異なったコホートにおける「家」意識

社会変動を考慮して，三つの異なったコホートの家族観を社会学的な視点から比較したものが，経済企画庁（1994）によって発表された。現在の高齢者世代は「多産多死型」に分類される。戦前の教育を受け，「家」制度の下で育った世代であり，三世代同居などの拡大家族が主流であり，夫婦の関係も妻は家長に従うものと考える世代である。中年世代は「多産少死型」に分類され，戦後の復興期に少年時代を過ごし，結婚生活や育児に入る頃には高度成長期を迎え，兄弟が多いことから長子が家を継ぎ，残りの子どもが核家族を形成した世代である。「家」制度は形式的に存続することができた世代である。団塊ジュニアや新人類と言われる若者世代は，「少産少死型」に分類され，平和な時代に生まれ，豊かさを享受でき，「家」意識が希薄になり，夫婦は互いに助け合う意識が強い世代である。世代が若くなるほど「家」へのこだわりは少なくなり，三世代同居も減少してきている。このように，異なったコホート集団として，社会学的な視点から意識調査を実施し，家族間の世代差を比較した研究は多い。しかし，家族メンバーとの情緒的・心理的な関係まで踏み込んだ研究は，まだ少ない。

「家」意識は時代とともに薄れてきたが，異世代間の交流によって，親世代が祖先から受け継いだ精神的・文化的遺産を，子世代に引き継ぐことは大切なことである。しかも，女性の就労が珍しくなくなった今日では，親世代による子育てへの支援が得られることの意義は大きい。逆に，人生経験の豊かな世代と若者世代の交流が失われることの弊害は，既に Bronfenbrenner（1971）によって指摘されている。アメリカでは，1950年～1960年の経済的な繁栄によって，都市化が進み，女性の就労が増加し，拡大家族はほとんど失われてしまった。少年の犯罪が増加し，凶悪化する原因の１つとして，Bronfenbrenner は研究データの分析から，異世代間の断絶が子どもの行動に対する監視が弱まってしまったためと主張した。都市化が進み，地域の人間関係が希薄化するわが国でも，同様の問題を抱えてきている。三世代同居のどのような側面が孫世代にプラスに作用するのかを含めて，三世代間の心理的な過程

を検討することが，今後は求められるであろう。

4．今日の三世代同居の様相

三世代が同じ家で同居する場合，それぞれの世代は，児童期から青年期を，異なった社会環境の下に育ったために，価値観が異なる。高齢者世代では夫に従い，舅姑に仕えることを教えられて育った世代である。「家」制度の下では，舅姑よりも嫁の立場は弱く，嫁は姑に苛められることが多かった。ところが「家」制度が廃止され，戦後の繁栄の中で女性達は社会に進出しはじめ，自分らしい生き方を模索し，自己主張や自立をするようになった。今日では，逆に舅姑の立場が弱くなってきている。特に夫の死去により残された姑，妻に先立たれた舅の立場は弱い。姑の方から嫁とどう折り合ったらいいのかと悩むケースが増えている。1992年時点の調査では，高齢者の自殺は他の年齢層よりも高く，しかも，老人世帯や独居の場合よりも同居世帯の方が高くなっている(経済企画庁，1994)。子世代との同居は，介護の不安を少なくし，子や孫との親密な関係を保つことができるために，理想的であると考えてきた。しかし，強くなった嫁，そして嫁の側につく息子，この状態で子ども家族との葛藤を抱えると，悲劇的な結末を迎えることになる。もし，舅姑が元気であれば，息子家族が家を出て別居することになる。舅姑が弱い立場であれば，他の親族に身を寄せるか，孤独を感じながら息子家族と同居を継続せざるを得ない。息子家族と同居の高齢者が，同居を継続するには，舅姑が自己主張を控え，寛容な態度で接して，息子や嫁とうまく折り合いをつけるような努力をするのが良い方法になる。息子家族と同居の高齢者には，このような態度や行動が認められるであろう。

一方，現在の高齢者世代と同居しているのは，「多産少死型」の中年世代である。この世代は長男である故に家を継ぐのは当たり前という意識はそれほど薄れていない。結婚と同時に同居した割合が高く，家族と呼べる範囲を同居に置く伝統的な「家」の意識を持っている。しかし，戦後の民主主義教育を受け，恋愛・結婚の自由や伝統的な性別役割分担意識が弱くなっている世代である。この世代はどのような理由で同居を決定したのであろうか。同居の要因を分析した結果からは，夫側，妻側ともに親が単身である場合か，持ち家の場合である。夫が長男であり，見合い結婚の場合は，夫側の親との同居率が高い。逆に，妻の兄弟が少なく，夫の親が他の親族と同居の場合には，妻側の親との同居が高くなっている。要するに，相手が長男で，夫の勤務が両親の家から通えるのであれば，同居するのは自然の成り行きであった。その結果として，親から住宅の提供を受け，子育ての支援を受けることになる。これは子世代にとって，メリットになっている。しかし，その一方で，家事に対する考え方の相違や育児観・教育観の相違，夫婦のプライバシーが守れないなどディメリットも多い。中年世代の嫁は，同居していても自分を押えることが少なく，寛容な態度をとることもより少ないものと考える。

5．娘家族との同居の心理的側面

三世代同居といっても娘家族との同居と，息子家族との同居は義理の関係の性が違うだけではない。親（特に母親）は幼少期には育児の主たる担い手であり，子どもと強いきずなで結ばれている。乳幼児の成長に母親（または，それに代わる人物）との絆が極めて大切であることは，ホスピタリズムやマターナル・デイプリベーションの研究から既に示唆されている通りである。この絆は乳児と母親との，密着した物理的距離を含めた相互作用によって形成されてくる。Bowlby（1969／1976）は比較行動学の知見に基づき，愛着ということばでこの母子の絆を説明している。乳児の愛着行動は母親との距離が，許容範囲を越えたと感覚器官が識別したときに始動し始める制御系である。抱きつく，後追いする，泣くなど，親子間の接近行動につながるような行動によって，子どもは親といつも接近した状態を維持することができる。離巣性の動物でも，親が移動するとそのあとを追いかける。子どもが親の許容範囲を越えて離れると，親自身も自分の近くに引き戻す行動が知られている。1歳過ぎると歩行が可能となり，2歳中頃からは自我がはっきりしてくる。母子分離が可能になるに従って，親は子どもとの距離を置くようになる。自我や自己が確立するに従って，パーソナル・スペースも明確になり，親子間の対人距離は広がる。2，3歳の幼児を対象として，母親と父親との対人距離を比較した結果，父親よりも母親との距離は接近し，しかも，親からの距離は息子よりも娘と接近していた(Brody, & Stoneman, 1981)。10歳から18歳を対象とし，年齢が低いグループ（10～12歳）と，年齢が高いグループ（13～18歳）に分けて，両親との対人距離を比較した研究では，年齢が低いグループの方が，年齢の高いグループよりも，母親・父親に接近していた。年齢が低いグループでは，娘は息子以上に母親・父親に接近していた。しかし，娘→母親と娘→父親の距離の差は認められていない。一方息子→父親の距離の方が，息子→母親よりも接近していた。年齢が高い群では，娘・息子いずれも父親・母親との距離が離れ，娘→（父親・母親）と息子→（父親・母親）の差は認めらなかった（Larson, & Lowe, 1990)。日本の親子間の対人距離を比較した今川(1993)の研究では，小学3年生・小学6年生・中学3年生では，すべて娘→（父親・母親）の距離の方が，息子→（父親・母親）よりも近く，娘→母親は最も接近していた。娘→母親，娘→父親の距離が，中学3年生でもそれほど離れていない日本のデータは，Larson と Lowe の研究の結果とは少し異なり，日本の方が母娘の距離が密着していることを窺わせる。高齢者世代と中年世代の親子関係をパーソナル・スペースによって検討した実証的な研究も，母親→娘は最も接近していた（今川，2000)。

要するに，娘は母親と心理的に接近した関係にある。その娘は嫁ぐことによって親から心理的には自立することになる。ところが，婿養子を迎える場合には，親と同居するために自立する機会を失いやすい。母と娘が心理的に接近したままである場合には，夫との関係に問題を抱える危険性がある。結果的に婿に入った夫が家での居場所を失うことにもなりかねない。

【研究の目的】

この研究は異なった社会背景の下で育った世代が,同じ家族として同居する場合について,家族間の心理的な関係をパーソナル・スペースの測定等から検討することを目的にしている。高齢者にとって，息子家族と同居の場合と，娘家族との同居の場合には，それぞれ家族の人間関係が異なる。その関係を一般化したのが次の Figure 1 である。最上段は息子家族と

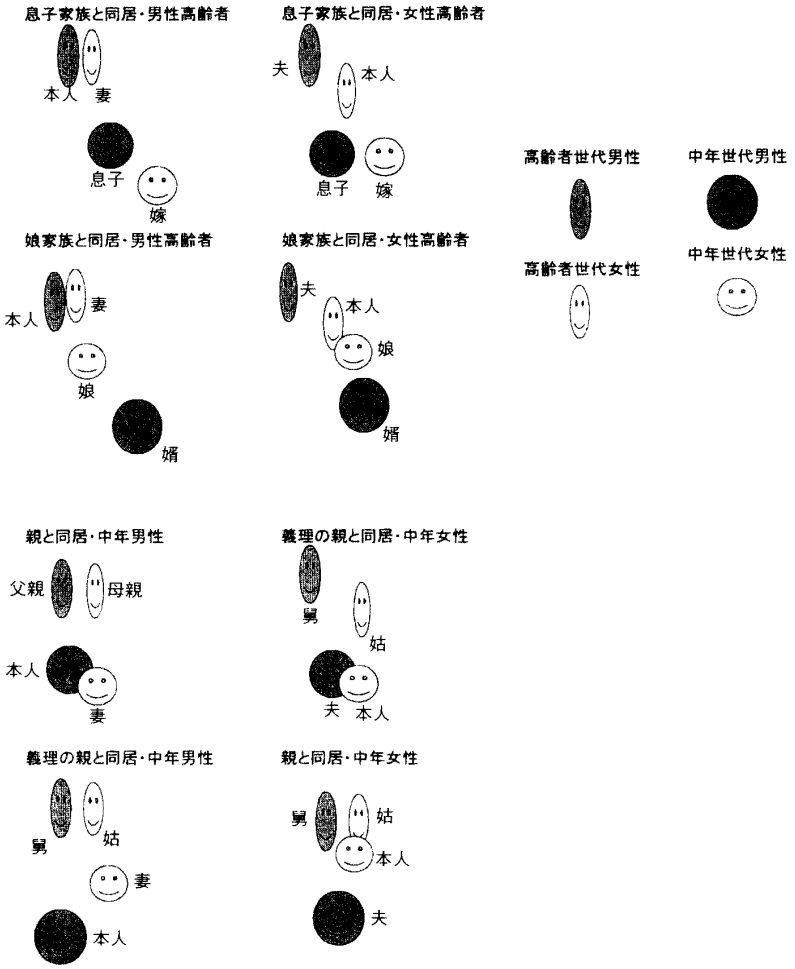


Figure 1　高齢者世代・中年世代における家族の心理的距離について

同居の高齢者から見た家族の心理的距離である。二段目は娘家族との同居の心理的距離を示している。「家」制度の下に育った高齢者世代では，一般的には同居を希望し，一体化した家族を理想とする。ただ，同居を維持するには，息子家族に気兼ねを感じ，息子や嫁とは距離を置く方法が良いと考えるため，パーソナル・スペースでは離れることになるであろう。高齢者世代の夫婦の関係については，（夫→妻）との距離の方が，（妻→夫）よりも接近する

であろう。それは男性の場合，退職を契機に付き合う仲間が少なくなり，妻との関係を見直すようになるためである。高齢になるほど，夫婦仲良く暮らすのが良いとの意見に賛同する割合が，男性ほど高くなる。

三段目は夫方の親と同居の場合の，中年世代から見た家族の心理的な距離である。中年男性では，子どもや妻とは最も接近し，両親とも接近した距離にある。ところが，中年女性では嫁の立場から見た家族の心理的距離であり，舅姑とはかなり離れた距離にある。

最下段は妻方の親と同居の中年世代を示したものである。男性にとっては，義理の親子になるため，妻が親と接近する状況下で，夫のみが家族全体とは心理的に距離を置いた関係にある。妻から見た場合では，実の親との同居で，家族全員と接近した距離になる。息子家族との同居と娘家族との同居の違いを，Figure 1 の図式として現すことを試みた。本研究は，Figure 1 の図式を高齢者世代と中年世代を中心にデータの結果から検証することが目的である。

【方法】

1．被験者

「家」制度の下で育った「多産多死型」の高齢者世代，戦後生まれの「多産少死型」の中年世代，そして団塊の世代ジュニアの「少産少死型」の若者世代の三世代が同居している家族を対象にした。選出方法は，三世代同居の大学生に調査の主旨を説明し，学生自身及び両親と祖父母に，質問紙とパーソナル・スペース検査を依頼した。質問紙とパーソナル・スペース検査はそれぞれ別の封筒に入れ，大学生を通して回収した。三世代同居の男子学生24名，女子学生32名の父親・母親56名，祖父・祖母56名を対象にした。学生を対象とした場合に，三世代同居の家庭がそれほど多くなく，母方の祖父母と同居は母集団自体が少ないために，データが片寄っていた。また，祖父母は死去・離別などにより，特に祖父はサンプル数が少なかった。

＜対象となった被験者＞

1）若者世代：　父方の祖父母と同居の男子学生15名（平均年齢19.2歳）
　　父方の祖父母と同居の女子学生27名（平均年齢18.8歳）
　　母方の祖父母と同居の男子学生９名（平均年齢19.0歳）
　　母方の祖父母と同居の女子学生５名（平均年齢18.8歳）

2）中年世代：　夫方の親と同居の中年男性42名（平均年齢48.3歳）
　　夫方の親と同居の中年女性42名（平均年齢45.9歳）
　　妻方の親と同居の中年男性12名（平均年齢50.1歳）
　　妻方の親と同居の中年女性14名（平均年齢47.1歳）

3）高齢者世代：息子家族と同居の男性高齢者25名（平均年齢75.8歳）
　　息子家族と同居の女性高齢者38名（平均年齢72.8歳）

娘家族と同居の男性高齢者５名（平均年齢75.0歳）
娘家族と同居の女性高齢者13名（平均年齢71.9歳）

２．家族に関する調査内容

１）学生へのアンケート（若者世代）：生年月日，同居の家族メンバー，結婚観，祖父母に期待することをアンケートによって回答を求めた。

２）学生の両親へのアンケート（中年世代）：生年月日，同居の家族メンバー，結婚の時期，結婚のきっかけ，両親との同居理由(義理の関係を含む)，両親に期待することの回答を求めた。

３）学生の祖父母へのアンケート（高齢者世代）：生年月日，同居の家族メンバー，結婚の時期，結婚のきっかけ，子ども家族との同居理由(義理の関係を含む)，子どもから期待されていることについて回答を求めた。

３．家族メンバーへの心理的評価：学生・両親・祖父母共通して以下の５項目について，５段階に評定させた。

１）学生用の評定項目：父親・母親・祖父・祖母の各対象ごとに，以下の５項目の評定を求めた。

例：①父親がいないと寂しい
②お互いの気持ちを分かり合える
③父親を頼りにしている
④父親の意見を尊重する
⑤いつも父親に助言を求める

２）学生の両親用の評定項目：妻(または夫)，父親(または舅)，母親(または姑)，子どもの各対象ごとに評定を求めた。

例：①妻がいないと寂しい
②お互いの気持ちを分かり合える
③妻を頼りにしている
④妻の意見を尊重する
⑤いつも妻に助言を求める

３）学生の祖父母用の評定項目：妻(または夫)，息子(または婿)，娘(または嫁)，孫の各対象ごとに評定を求めた。
項目内容は上記と同じである。

４．パーソナル・スペースの測定

１枚の用紙に１人の家族メンバー他が描かれた冊子を利用し，パーソナル・スペース検査は自分と見立てたシールを，被験者が相手の人物と気詰まりにならない程度の位置に投影させる方法を用いた。検査用紙には以下のような教示を印刷して，方法の周知徹底を図った。「こ

の冊子には，大人や子どもが描かれています。それぞれ異なった人物とあなたが話しをする場面を想像して下さい。そして，切りぬきの絵をあなた自身だと思って，あなたがある人物と話をしている場面を作ってください。絵に描かれた人物を考慮し，あなたと相手の人物が気づまりにならない程度まで接近した位置に，あなた自身である切りぬきの人物を貼りつけて下さい。該当する方がいない場合にはやらないで下さい。この調査の目的は，人と話をするときに，どのような距離をおくのかを，発達的な観点から調べることを目的としています。検査結果は統計的に処理しますので，個人名を対象としたものではありません。検査にご協力お願い致します」

1）学生用は，父親・母親・祖父・祖母・兄弟・姉妹・友人（男性）・友人（女性）・見知らぬ人物との対人距離を投影法によって測定できる冊子を使用した。

2）学生の両親については，配偶者・息子・娘・実父・実母・義父・義母・友人（男性）・友人（女性）・見知らぬ人物を用いた。

3）学生の祖父母については，配偶者・息子・娘・婿・嫁・孫（男子）・孫（女子）・友人（男性）・友人（女性）・見知らぬ人物を用いた。

5．実施日時について

調査や検査を学生を通して依頼し，実施したのは，1999年5月～8月である。

【結果】

アンケート調査・パーソナル・スペースの測定・家族メンバーへの心理的な評価のデータ整理には，SPSS 統計パッケージ8.0 J For Windows を利用し，NEC 9821パーソナル・コンピューターで分析した。

1．家族構成・結婚観・同居の理由

Table 1 ・Table 2 は，学生の回答から家族構成と結婚のきっかけについて世代別にまとめたものである。ほとんどの学生の両親は健在であるが，祖父は死去などにより少なくなっている。学生の祖父母（高齢者世代）・学生の両親（中年世代）・学生（若者世代）の三つの世代について，結婚観を比較した結果，高齢者世代の47.3%は親の薦めで，お見合いをして結婚している。恋愛結婚はわずか4.5%にすぎない。中年世代も親の薦めで，お見合いをして結婚した割合は高く，33.0%である。恋愛で結婚したものは，27.7%とそれほど高くない。ところが，学生の結婚観は92.9%が恋愛で結婚したいと回答している。学生の親である中年世代でも，親または知人の薦めで，お見合い結婚したものは，67.8%と，$^{2}/_{3}$以上がお見合いで結婚している。

同居理由を中年世代と高齢者世代に尋ねたところ，中年世代では，夫の親と同居の理由は，自分または夫が跡取りだからが91.7%にのぼる(Table 3 を参照)。妻の親と同居群でも53.6%が，妻が跡取りであることを同居理由に挙げている。「家」制度が廃止された後に生

Table 1　同居の家族メンバー

同居家族	父方の祖父母と同居頻度	%	母方の祖父母と同居頻度	%
父親	42.0	100.0	12.0	85.7
母親	42.0	100.0	14.0	100.0
祖父	25.0	59.5	5.0	35.7
祖母	38.0	90.5	13.0	92.9
兄	11.0	26.2	2.0	14.3
姉	13.0	31.0	4.0	28.6
弟	5.0	11.9	2.0	14.3
妹	17.0	40.5	3.0	21.4
その他	0.0	0.0	1.0	7.1

Table 2　結婚のきっかけ

	若者世代	中年世代	高齢者世代
親のすすめで，お見合いで	0.0	33.0	47.3
知人のすすめで，お見合いで	0.0	34.8	16.4
幼なじみでしっていて	1.8	1.8	0.9
恋愛結婚で	92.9	27.7	4.5
その他	5.4	2.7	30.9

数字　%

Table 3　同居理由について

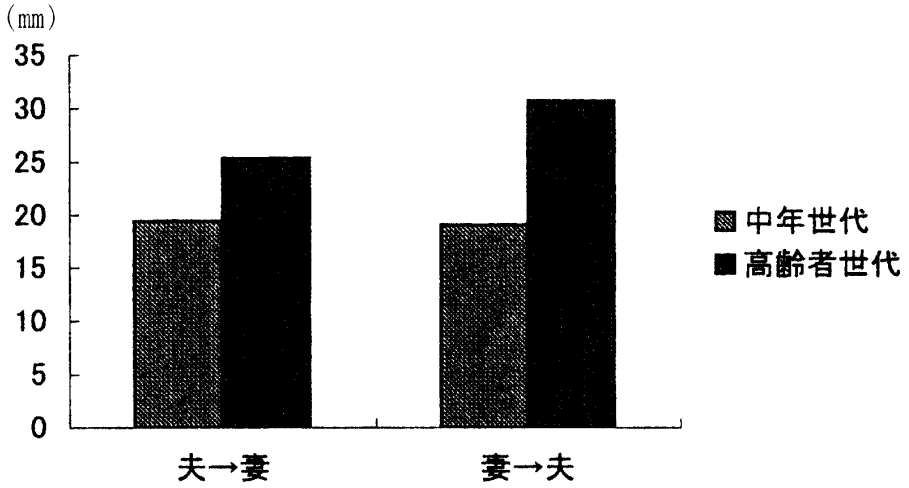
	中年世代		高齢者世代	
	夫の親と同居	妻の親と同居	息子家族と同居	娘家族と同居
跡取りだから	91.7%	53.6%	63.4%	46.4%
親（自分・妻）が高齢になったから	6.0%	21.4%	37.8%	46.4%
親（自分・妻）が病気になったから	4.8%	14.3%	1.2%	7.1%
親（子ども）が同居を望んだから	27.4%	25.0%	14.6%	14.3%
経済的に助かるから	4.8%	3.6%	13.4%	3.6%
その他	11.9%	10.7%	3.7%	3.6%

まれた団塊の中年世代でも，「家」を意識していることがわかる。そして，高齢者世代以上に，同居理由として跡取りを挙げる割合は高い。親が高齢になり，介護が必要になったからとの理由で同居した場合は，夫の親と同居より妻の親と同居の方が高い。高齢者世代の同居理由として，息子家族との同居では，63.4%が息子が跡取りであることを理由に挙げている。娘家族と同居でも，46.4%が娘が跡取りであることを挙げている。高齢者自身が高齢になったからを理由に挙げる割合も，息子家族と同居では37.8%，娘家族と同居では46.4%と，かなり高い割合になっている。高齢者世代の方が，そして娘家族と同居の方が，高齢者自身，または親が高齢になったからとの理由を挙げる割合が高い。

2．夫婦間のパーソナル・スペースについて世代と性の比較

（夫→妻），（妻→夫）についてのパーソナル・スペースを，図示したのがFigure 2である。（夫→妻），（妻→夫）の対人距離について，性×世代の2要因分散分析を実施したところ，世代の主効果が0.1%水準で有意であった（df＝1，F＝83.047，P＜0.001）。世代×性の交互作用は10%水準では有意となっていた（df＝1，F＝3.493，P＜0.10）。高齢者世代の方が，中年世代よりも（夫→妻），（妻→夫）は離れているが，交互作用が認められ，中年世代では（夫→妻），（妻→夫）の距離の差はそれほど顕著ではないが，高齢者ほど（妻→夫）の距離が離

Figure 2　配偶者間の対人距離



配偶者についての2要因分散分析

	df	F値	有意確率
世代	1	83.047	p<.001
性	1	0.277	-
世代＊性	1	3.493	p<.063
誤差	218		

れる結果となっていた。ここで対象とした家族はいづれも同居家族である。夫婦二人暮らしの場合の夫婦間の距離とは異なるであろう。三世代同居の場合には，同居している他の家族との関係を含めて考える必要がある。そこで，（父親→息子），（父親→娘），（母親→息子），（母親→娘）の対人距離について分析した。

3．（親→子）のパーソナル・スペースの世代と性別の比較

親子間についての対人距離をTable 4に，そして義理の親子間についてはTable 5に，世代別に比較した。（父親→息子），（母親→息子）について，高齢者世代の方が，中年世代よりも離れていた。特に（母親→息子）の距離は高齢者世代の方が，中年世代よりも顕著に離れていた。性と世代の2要因分散分析の結果，世代の主効果は0.1%水準で有意であった（df＝1，F=27.224，P<0.001）。そして，息子との対人距離の世代×性の交互作用が，0.1%水準で有意となっていた(df＝1，F=12.2，P<0.001)。青年期の息子に対する母親の対人距離は，父親以上に接近した距離をとり，父親との差が大きい。しかし，その息子が結婚し，家族をつくる年代になると，母親は息子とのパーソナル・スペースを広げる。一方，父親は青年期から，既に息子とのパーソナル・スペースは広がっていて，その後はそれほど変化はない。

Table 4　実の親子間のパーソナル・スペース

	息子←→父親		娘←→父親		息子←→母親		娘←→母親	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
中年世代	27.38	11.75	31.83	18.03	27.26	21.83	22.00	12.47
高齢者世代	27.14	13.07	27.08	16.19	37.92	26.37	20.08	13.78

単位　mm

Table 5　義理の親子間のパーソナル・スペース

	嫁←→義父		嫁←→義母		婿←→義父		婿←→義母	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
中年世代	31.52	22.70	29.08	22.51	32.00	16.26	50.45	37.23
高齢者世代	38.55	20.55	45.94	39.13	53.80	44.31	68.40	49.73

単位　mm

（父親→娘），（母親→娘）の距離は，世代の主効果が0.1％水準で有意であった（df＝1，F＝29.183，P＜0.001）。性の主効果も5％水準で有意であった。さらに，娘との対人距離の世代×性の交互作用も，1％水準で有意であった（df＝1，F＝8.158，P＜0.01）。青年期の（母親→娘）への対人距離は，最も接近した距離となっていた。しかし，（父親→娘）は離れていた。高齢者であっても，（母親→娘）への距離は，（父親→娘）よりも接近していた。

4．（子→親）のパーソナル・スペースの世代と性の比較

親は子どもの成長に従って，子どもとの対人距離を変化させる。では，子どもは親との対人距離をどのように変化させるのであろうか。Table 5は，（息子→父親），（娘→父親），（息子→母親），（娘→母親）についての対人距離を，世代と性別に比較したものである。

（息子→父親），（娘→父親）について，世代と性の2要因分散分析をした結果，世代の主効果は1％水準で有意であった（df＝1，F＝22.865，P＜0.001）。交互作用は有意ではなかった。（息子→母親），（娘→母親）については，世代の主効果が5％水準で有意であった。性の主効果と交互作用は有意ではなかった。娘や息子は，父親と母親共に，青年期から中年期に従って，親との対人距離を広げる。子世代が結婚し，家族をつくることを契機に，息子や娘は親とのパーソナル・スペースを広げ，親も息子や娘との距離を広げることになる。そこで次に，親子相互の関係と義理の親子の相互の距離を分析する。

5．親子・義理の親子相互の対人距離について

Figure 3－1とFigure 3－2は，実際に同居している（息子・娘）と（父親・母親）の対人距離，及び（婿・嫁）と（義父・義母）の相互の距離を示したものである。親子間の距離については，Figure 3－1に示されているように，それほど差が認められない。例えば，（息子→父親）は平均27.36mmであるが，（父親→息子）は平均27.14mmである。ほとんど差が認め

Figure 3－1　親子間の対人距離

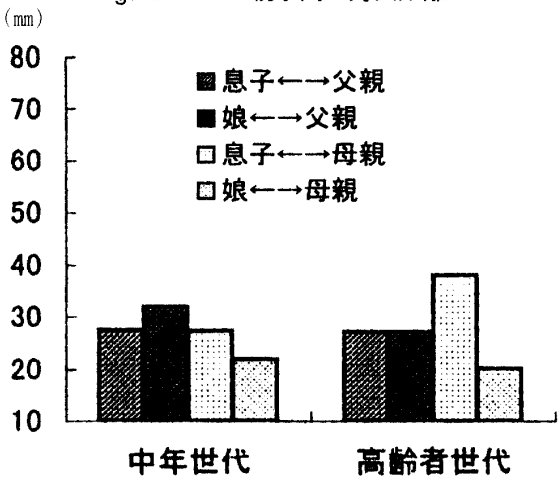
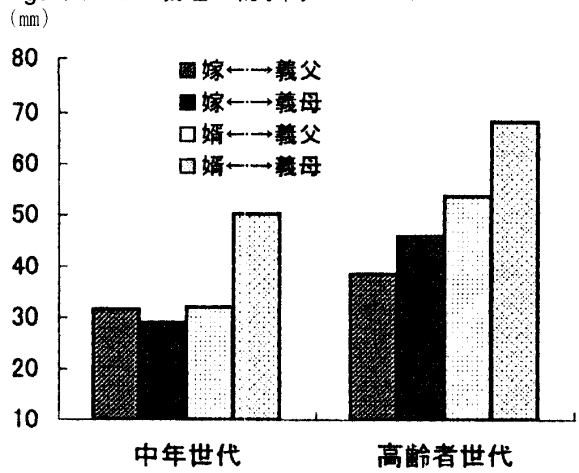


Figure 3－2　義理の親子間のパーソナル・スペース



られない。娘と母親についても，娘→母親は最も接近しているが，22.0mmであり，母親→娘は20.08mmで差が認められない。しかし，義理の親子関係にある人物との対人距離については，異なった様相になっている。Figure 3－2が示すように，義理の親子間は，実の親子以上に離れている。しかも，（嫁→義父）より（義父→嫁）が，（嫁→義母）より，（義母→嫁）が，（婿→義父）より（義父→婿）が，（婿→義母）よりも，（婿→義母）が，すべて離れた結果となっていた。この点について，家族メンバーへの心理的な評価と関連させて検討することにしたい。

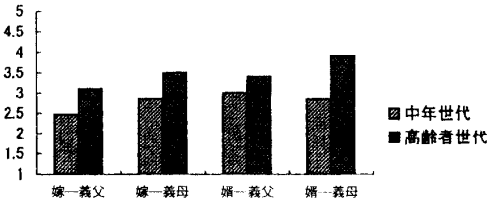
6．義理の親子間の心理的な評価について

社会調査のデータによると，家族と同じ家で一緒に暮らしたいと希望する率は，高齢者世代の方が中年世代よりも高くなっている。高齢者世代では，「家」の下に，家族を一体として見なす気持ちが強い。このため，家族の成員に対しては，身内意識が働き，情緒的な結びつきをより強く求め，相手に依存し，受容する態度が強いと考えられる。このため，家族メンバーへの心理的な評価は，中年世代以上に高いと予想される。この点を世代別に比較するために，義理の親子間について図示したのが，Figure 4－1からFigure 4－5である。高齢者世代の方が，「気兼ねしている」，「頼りにしている」，「意見を尊重する」，「いつも助言を求める」などの評定値が高い。義理の関係であっても，高齢者世代の方が嫁や婿に気兼ねしているが，相手への心理的な評価は高い。

7．同居形態が若者世代の家族メンバーの心理的な評価に及ぼす影響について

同居形態が親子・義理の親子に影響を及ぼすであろうことは推察できる。しかし，その影響は多様である。この研究では青年期の若者の父母や祖父母への心理的な評価に焦点を当てて検討する。5段階の評定値をもとに，最高を5点，最低を1点として得点化した。次に，同居形態を父方の祖父母と同居の場合，母方の祖父母と同居の場合に分類して，得点をもと

Figure 4－1　気兼ねしている

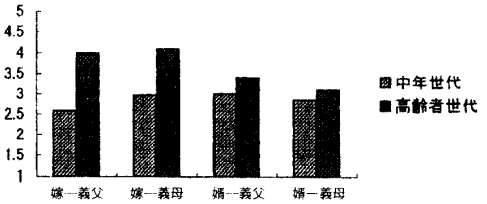


(1)気兼ねしている

	嫁←→義父	嫁←→義母	婿←→義父	婿←→義母
中年世代	2.46(0.78)	2.84(1.22)	3(0.89)	2.83(1.34)
高齢者世代	3.1(1.22)	3.5(1.40)	3.4(0.89)	3.9(1.20)

Mean(SD) mm

Figure 4－2　お互いの気持ちが分かり合える

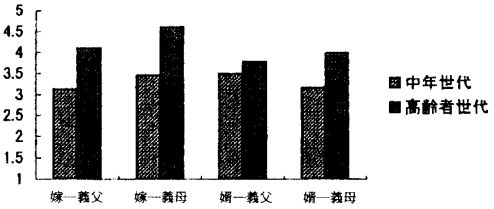


(2)お互いの気持ちが分かり合える

	嫁←→義父	嫁←→義母	婿←→義父	婿←→義母
中年世代	2.58(0.83)	2.97(1.03)	3(1.10)	2.83(1.06)
高齢者世代	4(1.02)	4.08(1.11)	3.4(0.99)	3.1(0.55)

Mean(SD) mm

Figure 4－3　頼りにしている

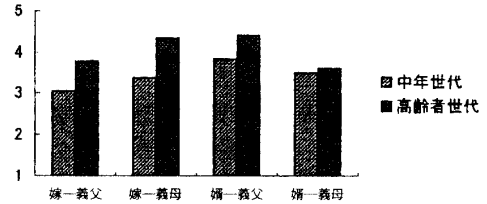


(3)頼りにしている

	嫁←→義父	嫁←→義母	婿←→義父	婿←→義母
中年世代	3.12(1.12)	3.45(1.01)	3.5(1.05)	3.17(1.47)
高齢者世代	4.09(0.92)	4.62(0.65)	3.8(0.84)	4(1.41)

Mean(SD) mm

Figure 4－4　意見を尊重する

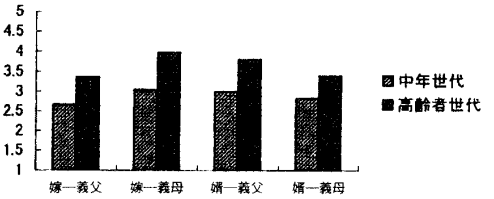


(4)意見を尊重する

	嫁←→義父	嫁←→義母	婿←→義父	婿←→義母
中年世代	3.04(1.16)	3.37(0.88)	3.83(0.75)	3.5(1.45)
高齢者世代	3.77(1.11)	4.33(1.04)	4.4(0.89)	3.6(1.26)

Mean(SD) mm

Figure 4－5　いつも助言を求める



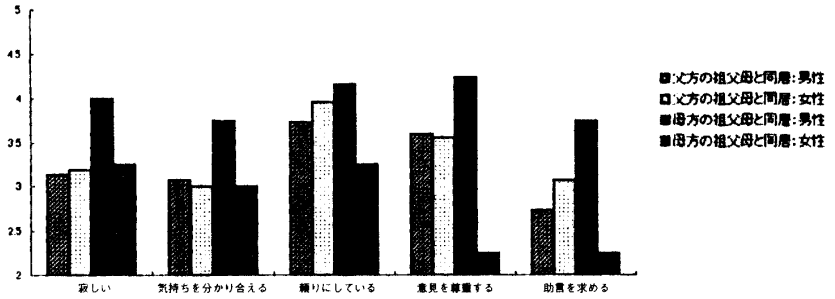
(5)いつも助言を求める

	嫁←→義父	嫁←→義母	婿←→義父	婿←→義母
中年世代	2.67(1.01)	3.05(0.90)	3(0.89)	2.83(1.27)
高齢者世代	3.36(1.26)	3.97(1.14)	3.8(0.84)	3.4(1.26)

Mean(SD) mm

に分析した。Figure 5－1 ～Figure 5－4 は，父親，母親，祖父，祖母への心理的な評価得点を示したものである。この得点をもとに同居形態と性の2要因の分散分析を実施した結果を

Figure 5－1　父親への心理的な評価得点

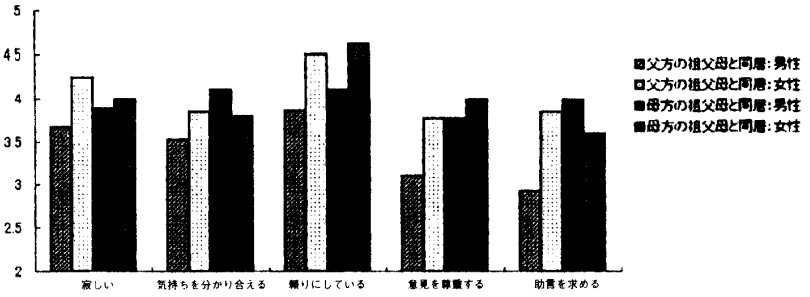


父親との心理的な関係の２要因分散分析

	df	同居形態（a）	性（b）	交互作用 a×b
寂しい	1	1.66	0.93	1.23
気持ちを分かり合える	1	1.05	1.5	1.05
頼りにしている	1	0.01	1.8	4.12
意見を尊重する	1	1.23	11.96＊＊＊	10.94＊＊
助言を求める	1	0.07	2.38	6.00＊

＊＊＊　P<.001
＊＊　P<.01
＊　P<.05

Figure 5－2　母親への心理的な評価得点



母親との心理的な関係の２要因分散分析

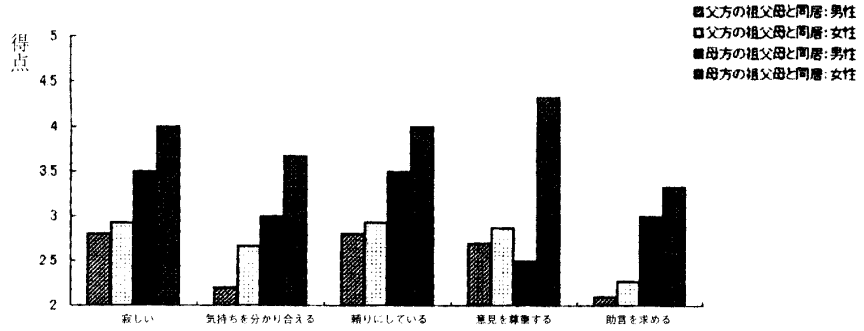
	df	同居形態（a）	性（b）	交互作用 a×b
寂しい	1	0	1.5	0.7
気持ちを分かり合える	1	0.77	0	1.11
頼りにしている	1	0.41	5.01＊	0.1
意見を尊重する	1	2.24	2.24	0.53
助言を求める	1	1.45	0.59	3.79＋

＊　P<.05
＋　P<.10

下に表示した。４種類のグラフ全般を比較するとき，母親への心理的な評価得点は，父親・祖父・祖母よりも高い。

家族メンバーについての得点を個別に検討すると，父親については，「意見を尊重する」の項目について，性の主効果が0.1％水準で有意であった(df＝１，F＝11.96，P<0.001)。さらに同居形態×性の交互作用も，１％水準で有意であった（df＝１，F＝10.94，P<0.01)。母方祖父母と同居の父親の場合，息子は父親に対して，意見を尊重し，助言を求める傾向が

Figure 5－3　祖父への心理的な評価得点

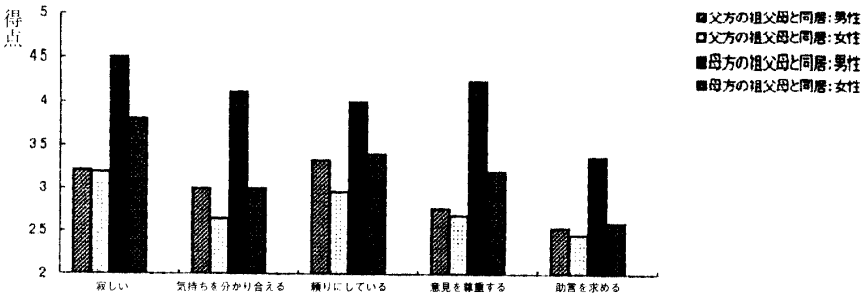


祖父との心理的な関係の２要因分散分析

	df	同居形態（a）	性（b）	交互作用 a × b
寂しい	1	1.51	0.49	0.03
気持ちを分かり合える	1	3.57＋	1.42	0.04
頼りにしている	1	2.32	0.3	0.1
意見を尊重する	1	1.26	3.15＋	2.19
助言を求める	1	3.53＋	0.23	0.03

＋　P<.10

Figure 5－4　祖母への心理的な評価得点



祖母との心理的な関係の２要因分散分析

	df	同居形態（a）	性（b）	交互作用 a × b
寂しい	1	5.81＊	0.44	1.49
気持ちを分かり合える	1	8.08＊	4.29＊	2.84
頼りにしている	1	3.54＋	0.98	0.45
意見を尊重する	1	10.88＊＊＊	2.43	1.69
助言を求める	1	1.89	1.44	0.97

＊＊＊　P<.001
＊　P<.05
＋　P<.10

強いが，逆に娘については，これらの項目の得点が低くなっていた。

母親については，「頼りにしている」の項目については，性の主効果が５％水準で有意であった(df＝１，F＝5.01，P<0.05)。同居形態を問わず，娘の方が息子よりも母親を頼りにしている。

祖父については，すべての項目について５％以上の水準で有意な主効果，交互作用が認められていない。しかし，祖母については，同居形態の主効果が「寂しい」,「気持ちを分かり

合える」,「意見を尊重する」の三項目で有意であった。「寂しい」については，同居形態の主効果が，５％水準で有意であった(df＝１，F＝5.81，P＜0.05)。「気持ちを分かり合える」については，同居形態の主効果が１％水準（df＝１，F＝8.08，P＜0.01),性の主効果も５％水準で有意であった（df＝１，F＝4.29，P＜0.05)。「意見を尊重する」については，同居形態の主効果が，0.1％水準であった（df＝１，F＝10.88，P＜0.001)。いづれも，母方の祖父母と同居の場合の方が，得点は高い。「気持ちを分かり合える」については，孫（男子）→祖母の方が，孫（女子）→祖母よりも得点が高い。

【考察及び今後の問題】

家族の心理的な関係について,パーソナル・スペースと心理的な評価をすることによって，高齢者世代及び中年世代を比較検討した。高齢者世代は,「家」制度の下で，児童期・青年期を育ってきた。このため，高齢者世代の結婚は，親の薦めによる割合が高く，本人の意向よりも親の意見が強く反映したものであった。「家」の継承意識が強く，子世代との同居を強く望む傾向にあると考えられる。特に息子家族との同居には，息子が跡取りであることを63.4％のものが挙げている。そして，高齢者にとって，自分たちが高齢になったことを挙げる割合も37.8％と高い。高齢者と同居の中年世代では，夫が跡取りであるとの理由は，91.7％にのぼる。戦後生まれの中年世代でも，親との同居は，経済的な理由ではなくて，跡取りを意識し，親が望む結果として同居に踏み切っている実態が認められる。

夫婦間の対人距離を，中年世代と高齢者世代で比較した結果，男性についてはそれほど差が認められなかったが，女性高齢者では男性以上に夫との距離が離れていた。パーソナル・スペースが親密さを反映するならば，夫は妻に対する親密な気持ちをそれほど変化させないが，妻は加齢に伴って，夫と距離を置くようになることを意味する。総務庁長官官房老人対策室編（1990）によると，夫婦仲良くすることが望ましいとの意見について，男性は高齢者ほど賛成する率が高くなり，逆に女性は若い世代ほどこの意見に賛同し，高齢者になるほど，支持する率が低くなるという結果となっていた。この調査と一致する結果であった。

次に（親←→子）のパーソナル・スペースについて，発達的な視点から，まず考察する。親子間の距離は，特に（母親→娘・息子）の距離は，（父親→娘・息子）よりも接近している。すでに青年期からは，父親は娘・息子との距離を置くようになる。母親が娘・息子との距離を広げる１つのきっかけは，息子や娘の結婚であろう。結婚するまでは，娘・息子とは接近した距離をとる。娘や息子も結婚し，子どもが生まれてからは，次第に母親との距離を広げる。ただ，娘家族と同居の母親については，娘と心理的な距離は接近したままになりやすい。Figure３－１に示したものは，娘家族と同居の高齢者世代の母親の距離を示したものである。同居の息子には離れた距離をとるのに対して，娘には接近し，対照的である。

義理の親子関係は，Figure３－２に示されるように，高齢者世代の方が，中年世代以上に

対人距離が離れていた。特に（義母→婿）は最も離れていた。これは中年世代であっても，共通した傾向として認められ，（婿→義母）は最も離れていた。要するに中年世代の男性としては，妻の母親に最も気兼ねし，高齢者世代の女性も，娘の夫である婿には気兼ねをしていることになる。義理の関係にある人物とのパーソナル・スペースが広がるのは，相手への気兼ねやネガティヴな感情を抱くからである。ただ，高齢者が義理の関係にある婿や嫁に，広いパーソナル・スペースをとるのは，ネガティヴな感情を抱いているためと解釈するのは間違っている。それは，社会調査から，高齢者ほど家族が大切であると答えていることが報告されていることと，本研究の心理的な評価の得点が，高齢者世代では高いことによる。要するに，義父も義母も，婿や嫁に対して，気兼ねをしてはいるが，気持ちがわかり合えると考え，頼りにし，意見を尊重し，助言を求めるなど，中年世代以上に受容的・依存的な態度を抱いていることがわかる。高齢者世代の方が，三世代同居を強く望み，そのために婿や嫁に対して，距離を置き，嫁や婿に気を遣い，寛容な態度で接していることが窺われる。

最後に，同居形態による影響について考察を進めよう。本研究では若者世代のみを中心に分析を試みた。この結果，「父親の意見を尊重する」については，父親が跡取りの場合よりも，婿養子の場合の方が，息子は父親を高く評価していたが，娘については，逆に婿養子の父親を最も低く評価した結果となっていた。婿養子の父親の微妙な立場を，同性である息子は理解して高く評価していた。しかし，微妙な，弱い立場の父親を，異性である娘は共感できないために，得点が低くなっていたと考えられる。

同居形態による主効果が認められたのは，祖母への心理的な評価についてであった。最も得点が高かったのは，娘家族と同居の場合であった。子どもは本来，母親との関係が強い。母親の日常生活における態度や行動は，子どもにも影響を及ぼす。娘にとっては，義母よりも実母の方が頼りになり，助言を求めることも多いのは当然である。この娘の態度が，孫たちの祖母に対する評価を高めるように作用する。母親—娘が親密であれば，祖母と孫も親密な関係になる。逆に嫁と義母の折り合いが悪い場合には，母親を通しての（孫→祖母）への評価は，マイナスに働くことになる。三世代の交流は，孫世代と祖父母世代をつなぐ親世代のあり方によって，変わることを指摘したい。

最後に，本研究はパーソナル・スペースの測定と，心理的な評価をもとに，高齢者世代と中年世代を比較検討した。パーソナル・スペースは性・年齢・社会的地位・性格などと関連することを Hayduk（1983）がレビューしたが，多くの研究結果から最も支持されいていることは，相手との親密さが反映する点である（Gifford, 1997）。ここで測定した対人距離は，相手との親密性の程度を，物理的な距離を利用して推測している。その意味で義理の親子間は離れ，夫婦間・親子間は接近していた。この距離を心理的な尺度として解釈する場合に，すべて親密性の次元として捉えることには問題がある。家族のあり方は多様である。欧米では若い世代が親世代と同居することは極めて少ない。これは，子世代が親との同居を拒む結果

によるのではなく，親世代からの要望であり，同居していなくても子・孫とは親密な関係が保たれている(Kahana & Kahana, 1970)。しかも，高齢者はいつでもそれぞれ孫を養育する機会が得られ，孫と親密な関係を保つことに満足感を感じている(Feldman, et al., 1981; Thomas, 1986)。三世代で同居する義理の子どもに気兼ねするのは，親密性の程度が低いからと解釈していいのであろうか。親子間について，パーソナル・スペースの測度と心理的な評定得点の相関を検討した結果，若者女性と父親の相関が有意であったのは，「頼りにしている」(Spearman の相関値＝.553，P<0.001）であった。母親で相関値が有意であったのは，「気持ちを分かり合える」(Spearman の相関値＝.362，P<0.05）であった。(母→娘）の接近した距離は情緒的な次文を反映していたと言える。このように，パーソナル・スペースに反映する心理的な過程が，父親か母親かによって微妙に異なることになる。パーソナル・スペースの解釈をどのようにするのかについては，今後の検討課題である。

世代間交流は，祖父母からの精神的・文化的遺産を受け継ぐ意味で大切である。さらに女性の就労率が高い今日において，祖父母による子育てへの支援が得られることは，親世代にとっても，子世代にとってもメリットになる。この場合に，親の養育行動は，子どもの発達に直接的に作用するが，祖父母からの影響も直接的・間接的な意味で重要な役割を果たすことになる。Bronfenbrenner（1997）は現実の社会の中で育つ子どもを生態学的な視点から研究する場合に，マイクロシステム・エクソシステム・メゾシステム・マクロシステムの４つのシステムを区分し，PPCT モデルによって分析する方法を提唱している。三世代の同居家族についての研究は，複雑な変数が関与する事象である。今後，研究を発展させるには，このようなモデルなどを利用し，検討する必要があろう。もう一方で，同居ゆえに家族メンバー間で葛藤を抱えている場合もある。この点を考慮して，個々のケースについて，家族関係のゆがみなどに着目し検討することが重要と考えられる。

【引用文献】

Bowlby, J. (1976). 母子関係の理論 I 愛着行動. (黒田実郎・大羽シゲル・岡田洋子訳). 東京；岩崎学術出版. (Attachment and loss., vol. 1 Attachment. Hogarth Press. 1969).

Brody, G. H., & Stoneman, Z. (1981). Parental nonverbal behavior within the family context. Family Relations, 30, 187-190.

Bronfenbrenner, U. (1971). 二つの世界の子どもたち. (長島貞夫訳). 東京；金子書房. (Two worlds of childhood: U. S. and U. S. S. A. 1970).

Bronfenbrenner, U. (1997). The ecology of developmental processes. In Lerner, R. M.(ed.) Handbook of child psychology. (5 th ed.) (pp. 993-1028). New York; John Wiley & Sons, Inc.

Elder, G. H., Modell, J., & Parke, R. D. (1997). 時間と空間の中の子どもたち－社会変動と発達の学際的アプローチ. (本田時雄監訳). 東京；金子書房. (Children in time and place-developmental and historical insights-. Cambridge University Press. 1993).

Feldman, S. S., Biringen, Z. C., & Nash, S. C. (1981). Fluctuations of sex-related self-attributons as a function of stage of the family life cycle. Developmental Psychology. 17, 24-35.

Gifford, R.(1997). Personal Space. In R. Gifford. Environmental Psychology (2 nd ed.), (pp. 95-117). Boston : Allyn & Bacon.

今川峰子. (1993). パーソナル・スペースに影響する年齢・性・親密性・居住地域の分析. 聖徳学園女子短期大学紀要. 第21集, 岐阜：1-16.

今川峰子. (2000). 家族と住まいの生態学的研究—パーソナル・スペースによる家族関係診断の試み—岐阜聖徳学園大学紀要. 第39集, 岐阜：49-68.

Kahana, B., & Kahana, E. (1970). Grandparenthood from the perspective of developing grandchild. Developmental Psychology, 3, 98-105.

金子幸子. (1992). 憲法24条と新しい民法. 総合女性史研究会編. 日本女性の歴史 (性・愛・家族). 東京：角川選書.

経済企画庁. (1994). 平成6年度版国民生活白書. 東京：大蔵省印刷局.

Larson, J. H., & Lowe, W. (1990). Family cohesion and personal space in families with adolescents. Journal of Family Issues, 11, 101-108.

総務庁長官官房老人対策室編. (1990). 長寿社会と男女の性役割・意識. 東京：大蔵省印刷局.

総務庁長官官房老人対策室. (1982). 老人の生活と意識—国際比較調査報告1回. 東京：中央法規出版.

総務庁長官官房老人対策室. (1987). 老人の生活と意識—国際比較調査報告2回. 東京：中央法規出版.

総務庁長官官房老人対策室. (1992). 老人の生活と意識—国際比較調査報告3回. 東京：中央法規出版.

総務庁長官官房老人対策室. (1997). 老人の生活と意識—国際比較調査報告4回. 東京：中央法規出版.

Thomas, J. (1986). Gender differences in satisfaction with grand-parenting. Psychology and Aging. 1, 215-219.